ジャポニスムと日本の園芸植物

ジャポニスムの始まり

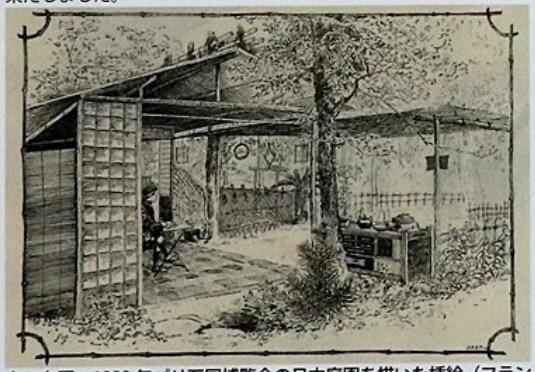
江戸時代を通じた鎖国政策のため、西洋人には神秘のヴェールに包まれていた日本でしたが、1859 年に長崎・神奈川・箱館が開港すると、これまでと比較にならない量の物や情報が運ばれ、大都市に暮らす一般市民でも日本の美術品や工芸品などに直接触れることができるようになりました。日本を知った西洋の人々は、日本文化の異質さと水準の高さに目をうばわれ、まもなく日本文化を生活に取り入れ愛好しようとする流行「ジャポニスム」がはじまりました。

日本の園芸文化にも関心が高まる

西洋の人々を驚かせたのは、江戸時代に高度な発展を遂げた日本の園芸文化も例外ではありませんでした。日本の開港と同時に欧米各国から派遣されたプラントハンターは日本の植物を収集して持ち帰り、受け取った園芸商はすぐに増殖・販売をはじめました。日本の植物が身近になったことに加え、日本から来た物のなかでも特に人気を集めた浮世絵に、園芸を含む日本の生活文化が描かれることが多かったことも、日本の植物への関心を高める要因となりました。

万国博覧会で日本の植物をアピール

その頃、1851 年のロンドンでの開催を皮切りに、欧米主要国で数年ごとに万国博覧会が開かれており、日本は 1873 年のウィーン万国博覧会から公式参加をはじめました。
万国博覧会への参加の目的は、日本庭園をつくり、美術工芸品を展示するなどによって日本文化や物産をアピールし、欧米市場の動向を把握して輸出産業の振興を図ることでした。
なかでも園芸植物は主要な輸出品目のひとつでした。そのため、日本から生きた植物を大量に持ち込み、伝統的手法に基づいて展示を行うなどにより、日本の園芸植物の魅力と楽しみ方を発信しました。これらの活動はジャポニスムの流行に格好の刺激を与え、日本の園芸植物への関心を高める役割を果たしました。



上・右図：1889 年パリ万国博覧会の日本庭園を描いた挿絵（フランスのニュース雑誌「ル・モンド・イリュストレ」より）（Le Monde illustré,Nov. 9, 1889）（Bibliothèque nationale de France）

上図：「Le Japon Artistique (芸術的な日本)」（ 1888-91 年にフランスで計 40 冊発行された日本美術月刊誌）の表紙に模写された浮世絵「風俗東之錦 (植木福寿草売り)(鳥居清長 ,1783 年頃)」(Le Japon Artistique. No7. Nov 1888.) (Bibliothèque nationale de France)

上図：クロード・モネ「ジヴェルニーの日本の橋と睡蓮の池」（1899 年）（フィラデルフィア美術館蔵）（Wikimedia Public domain）

上写真：歌川広重（1797-1858）「名所江戸百景 亀戸天神境内」（1856 年）（国立国会図書館蔵）

絵画にみる日本の園芸植物

ジャポニスムの影響化にあった画家たちは、浮世絵に触発されて既成の表現手法から離れた新しい色彩表現や構図を試みるようになりました。また、ピエール=オーギュスト・ルノワール（1841-1919）やジョン・シンガー・サージェント（1856-1925）の絵画（下図、下左図）にあるように、画家たちは団扇（うちわ）、提灯などの日本の工芸品や、キク、ヤマユリなどの日本の園芸植物を好んで描いています。こうした例は、画家たちのジャポニスムへの傾倒を示すとともに、その頃日本の工芸品や園芸植物がいかに普及し愛されていたかを物語っています。

日本に触発された庭づくり

クロード・モネ（1840-1926）は、1890 年にフランス・ジヴェルニーの地所を購入して庭づくりに着手しました。フジ、ツツジ、キク、ハナショウブなどの日本の植物を取り寄せては植栽し、日本の回遊式庭園にならって園路を蛇行させ、近くの川から水をひいて池をつくり、「名所江戸百景 亀戸天神境内」の浮世絵を模した太鼓橋をかけました。「画家にならなかったなら庭師になっていただろう」と語ったモネは、庭づくりを終えると庭内で数多くの絵画を描きました。

ジャポニスムの終わり

日本の事物の普及に伴い、西洋人が当初日本に抱いた異質な印象は薄れていきました。日本側から供給する事物に西洋の嗜好に合わせた改良が施されるようになったこともエキゾチックな印象を弱めることにつながり、20 世紀の初め頃を境にジャポニスムの熱狂は下火になっていきました。

上図：ルノワール「うちわを持つ少女」（1881 年）（クラーク美術館蔵）（Wikimedia Public domain）

左図：サージェント「カーネーション、リリー、リリー、ローズ」（1886 年）（テート・ブリテン蔵）（Wikimedia Public domain）